

九州浪曲史

の可能性



2024年

12月18日(水)

開演18時(19:40終演予定)

【会場】

北九州市立大学北方キャンパス
本館C401教室

浪曲口演：五月一秀「富島松五郎伝」

(原作:岩下俊作『富島松五郎伝』中公文庫より)

三味線：沢村さくら

三二講座：真鍋昌賢(北九州市立大学文学部)

参加方法：本講座はどなたでも参加可能です。参加には、事前申し込みが必要です。右のQRコードを読み取り、必要事項を入力してください。QRコードを読み取れない場合は、093(964)4133【比較文化学科資料室】もしくはkitabunnet@gmail.comまで氏名・メールアドレス・所属をお伝えください。



※先着順に受付。満員になり次第締め切りとなります。



主催：北九大文化資源調査隊(北九州市立大学文学部) 共催：北九州大衆文化史研究会・九州浪曲史研究会
(2024年度学長選考型研究費A「九州浪曲史記述の可能性—北九州から照射する大衆文化の流通と受容—」)

KITAKYU ROKYOKU

前口上—九州浪曲史の可視化にむけて—

浪曲(浪花節)は、20世紀前半において、押しも押されぬ大衆娯楽の人気ジャンルでした。現在の口演形式を定着させたのは、桃中軒雲右衛門とされ、福岡県での活動がきっかけとなり、東京の大劇場で興行を次々に成功させました。それが後押しとなり明治末年、浪曲は爆発的な流行を迎えます。大正期から昭和期戦時下にかけて、あらゆるレーベルから浪曲レコードが発売されました。戦前から戦後にかけてラジオでも人気が高く、1950年代に民間放送がはじまった際には、浪曲番組は、聴取率上位の常連だったのです。

関東・関西・中部とならんで、九州にはかつて独自の興行圏があり、数多の浪曲師が居住・稼働していました。大正期初頭の九州番付には三百数十名の浪曲師(浪花節演者)が列記されており、数多くの演者が活躍していたことがうかがえます。ここに挙げたのは、九州における浪曲受容のおもかげがうかがえるいくつかの史料です。

しかし、九州の浪曲については、雲右衛門への注目の他はおおよそ限定され、学術的な研究はあまり進んでいません。一方で現在、九州在住のプロ浪曲師は五月一秀さんのみとなりました。文献にせよ、聞き書きにせよ、資料収集が急がれる状況です。九州固有の浪曲史を記述し直すことは、ひろく日本の大衆文化史を複眼的に描き直す糸口になるでしょう。今回は、大衆の喜怒哀楽をゆさぶった浪曲に、まずはふれてもらうために、北九州にゆかりの深い五月一秀さんに、「無法松の一生」で知られる「富島松五郎伝」を浪曲化した演目の口演を、お願いしました。三味線は当代きっての人気曲師・沢村さくらさんです。またお二人には、「浪曲教室」と題し、みなさんを鑑賞の入り口へとといざなっていただきます。

浪曲師の声・節の響きに、曲師が奏でる三味線の音色に、耳を傾け、北九州から、九州浪曲史に目を凝らし、近代日本の大衆文化史を編み直す冒険に、一歩踏み出してみたいのです。(真鍋昌賢)

★実演・浪曲教室★

五月一秀／浪曲師

遠賀郡香月町(現八幡西区)出身。1973年、五月一朗に入門。同年、五月秀若として初舞台(於木馬亭「父帰る」)。長期休業ののち、2012年、五月一秀として復帰。黒崎ひびしんホール(2016年)、中間ハーモニーホール(2018年)で独演会を開催。九州・大阪・東京などで幅広く活躍する。「富島松五郎伝」の浪曲化を試みるほか、演目研究に熱意を注ぐ。レパートリーは、「神戸の長吉」「高瀬舟」「隅田八景」「乃木將軍伝—伊勢参り」など多数。

沢村さくら／曲師

山形県出身。千葉大学看護学部卒。2000年、沢村豊子に弟子入り、同年初舞台。関東・関西両方の浪曲を存分にこなす曲師として活躍。2015年より「曲師の会」を継続。コンテンポラリーダンスや人形劇と共演するなど、曲師の可能性を開拓してきた。「浪曲三味線ワークショップ」を主宰し、後進の育成にも取り組む。テレビ・ラジオ出演多数。第18回上方の舞台裏方大賞(2021年)、令和2年度大阪文化祭奨励賞(2021年)を受賞。

★司会・ミニ講座★

真鍋昌賢／北九州市立大学文学部・教授

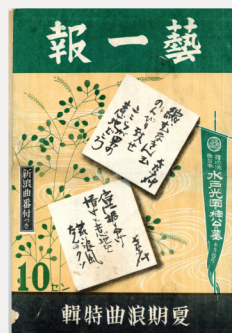
北九大文化資源調査隊・隊長。専門は、民俗学・口承文芸研究他。単著書に『浪花節 流動する語り芸—演者と聴衆の近代』(せりか書房2017年、第40回サントリー学芸賞受賞)、編著書に『浪花節の生成と展開—語り芸の動態史にむけて』(せりか書房2020年)。



浪曲特選大会(興行ビラ、大分県中津市)、個人蔵



中川明徳編・発行『宮川左近』1936年、個人蔵



『雲』1巻10月号、1911年、個人蔵

『藝一報』10巻6号、1935年、個人蔵

★★★浪曲とは★★★

近現代日本における代表的な語り芸。かつては浪花節と呼ばれ、九州では祭文とも呼ばれた。曲師による三味線の伴奏をとめない、節(ウタウ部分)と啖呵(カタル部分)で構成された物語を、テーブル掛けて覆った演台を前にして、浪曲師が口演する。義士伝、侠客伝はじめ多種多様な演目があり、文芸作品の浪曲化も積極的に進められた。

12月18日(水)18時 北方キャンパスC401

年末を飾るお楽しみ 浪曲なら北九大!!